2025年8月3日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

わが愛の内にとどまれ

［申命記5章1～21節］

 モーセは、全イスラエルを呼び集めて言った。イスラエルよ、聞け。今日、わたしは掟と法を語り聞かせる。あなたたちはこれを学び、忠実に守りなさい。我々の神、主は、ホレブで我々と契約を結ばれた。主はこの契約を我々の先祖と結ばれたのではなく、今ここに生きている我々すべてと結ばれた。主は山で、火の中からあなたたちと顔と顔を合わせて語られた。わたしはそのとき、主とあなたたちの間に立って主の言葉を告げた。あなたたちが火を恐れて山に登らなかったからである。

主は言われた。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれない。安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。

あなたの父母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生き、幸いを得る。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。隣人に関して偽証してはならない。あなたの隣人の妻を欲してはならない。隣人の家、畑、男女の奴隷、牛、ろばなど、隣人のものを一切欲しがってはならない。」

[1]　「平和」を祈る月に「申命記」を

　今年も8月がやってきました。8月は何と言っても「平和」を祈る月ですね。既に讃美歌もそのような祈りの讃美歌をご一緒に歌いましたし、いつもの交読文は、「へいわこうどくぶん」の交読を今月は第4週まで致します。

「平和」というものが嫌いと言う人は、きっと世の中にいないと思います。しかし、それでも「平和」ではない状態、戦いや争いの状態がこの世の中で全くない日は一日たりとも無いと言わざるを得ません。悲しいことです。そして、そことは私たちの日常においても問われることなのだと思います。「平和」って何なのだろうって改めて考えてみると、それはそのような「状態」と言うよりも、「関係」や「関係性」の問題ではないかと思うのです。

聖書が描くのも、ぼや～っとしたユートピアではありませんね。「人間」だけが存在する世界観を聖書は描きません。聖書が語るのは、「初めに、神は天と地を創造された」（創世記1:1）、神があってのこの世界であり、また「神はご自分のかたちに人を創造された」（1:27）とあるように、主の御手と、主のいのちの息が吹き込まれることによって人間が生き始めたという、‟神様との関係性”あっての私たちの存在・命であるということを語っています。言ってみれば、これは信仰者のアイデンティティー、立ち位置です。

8月に入って、この月の『聖書教育』の聖書箇所は、「申命記」に入りました。旧約聖書の第５番目の書物。旧約は、あのモーセがイスラエルの民を率いて奴隷状態だったエジプトから出たのが「出エジプト記」であって、その後は「レビ記」「民数記」と続いています。イスラエルの民は、神様が与えて下さるカナンの地を目指して旅をしています。「民数記」には、荒野でのほぼ40年にもわたるその長い旅の出来事が記されています。そして「申命記」になるのですが、実はこれは、最後の章（34章）のモーセが死に、葬られたことの記述を除けば、全体はたった一日の中でモーセが民に語った「説教」集とも言える内容です（申1:5参照）。ちょっとビックリですね。今日は5章を少し長く読んで頂きました。お聴き下さってすぐに気が付かれたことと思いますが、ここには、いわゆる「十戒」のリピート（繰り返し）が記されています。既に出エジプト記に出ているのにどうしてでしょうか。その理由は、出エジプト記の方は、リアルタイムの「十戒」ですが、この申命記の方の「十戒」は、約40年経ち、世代が変わった者たちが初めてのようにモーセの肉声を通して聴いている形です。

モーセは、語って語って語りました。考えてみると当時の人々は凄いと思います。話されたことを、聴いて記憶するのです。しっかり覚え込む。紙文化はまだまだです。そして、聴いたなら、その言葉に生きたのです。「聴くこと」と、「生きること」が一つ。今の時代に生きる私たちへのチャレンジが、この申命記の時代に生きた者たちから来ているように思います。また、モーセはこれを語って、自分はカナンに入らずにその生涯を終えました。その意味でも、この書物自体が、モーセの‟遺言”でもあると言えるのですね。

[2] 「平和」「幸い」は、関係性の中にある

聖書の言葉というのは、考古学的に考えれば古代文書の記録、ということになってしまいますが、これは死んだ言葉ではありません。常に新しい神様の言葉なのです。申命記5:2～3にこうありました。「我々の神、主は、ホレブで我々と契約を結ばれた。主はこの契約を我々の先祖と結ばれたのではなく、今ここに生きている我々すべてと結ばれた。」 ―「今ここに生きている我々すべてと結ばれた」と。ここには、私たちも加えられていると考えと良いのですね。

そして、モーセが語り始めたのが、あの有名な「十戒」です。今日はここでそれらを丁寧に見て行くことは致しませんけれども、この8月は特に自分自身を見つめながら聴いていくことが出来たら良いと私自身思っています。そしてこの「十戒」で見過ごしにしては行かないのは、十の戒めの前に語られている「前文」「序文」です。こうあります。6節。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。―これは、私たちの立ち位置を教えていると思います。一言で言うなら、「数えてみよ、主の恵み」です。私たちが、私が、どういう所から救い出されたのか。偶然でも運でもなく、主ご自身が、私たちを愛し、憐み、私たちを縛り上げていたものから解放して下さったのだということ、その事実をまずしかと覚えるようにと言うのです。そして、その上で、神様を真の神とすること、偶像に頼らないこと、また、神に等しく創造され、愛されている隣り人と平和に暮らすことを命じているのです。「十戒」というのは神様による、愛の律法です。

先ほど私は「平和」というのは。「状態」ではなく、「関係性」のことを言うのではないかとお話ししました。「平和」、或いは「幸せ」と言っても良いかと思いますが、そのことを或るテレビドラマからも改めて思わせられたのですが、それは先日金曜日に放送していたNHKの連続テレビ小説の『あんぱん』です。その時の場面は、やがて「あんぱんまん」の漫画家になるやなせ（TVでは柳井）たかしが、色々あったのですが、遂に同郷の幼馴染みののぶと結婚生活をはじめようとするシーンです。二人はまだ若く、貧しいのです。家もかわや（厠）の屋根が破れているような所です。その家のすぐ外、星空を見上げながら、二人は並んで座っています。嵩はちょっと気張って、のぶに「これからはのぶちゃんには負担をかけないから。頑張るよ」と言うのです。のぶは高知弁で「そんなに頑張らんでいいきね」と言います。そしてのぶがしみじみいいます。「うち、ごじゃんと幸せや。嵩といるだけで。でも、今が一番幸せだったら嫌やなぁ」と。それに対して嵩は言います。「ぼくが、もっと幸せにする」。それを聞いたのぶ。（あとは会話だけを紹介します）。

のぶ「幸せって、誰かにしてもらうもんじゃのうて、二人でなるもんやないのか？」

嵩「ふたりで？」（少し沈黙）

のぶ「ふたりで探して行こう。何が起きてもひっくりかえらんもの」

嵩「そうだね。ふたりならきっと見つかる」

…生活はこれからどうなるか分からない貧しさの中にあります。でも心は平和と幸せに満ちています。ああ、「幸せ」っていうのは条件が整うことではなく、「関係性」なのだなぁと思いました。自分だけで頑張ることとも違う。神様は、関わりの中に生きる幸いを与えたいがために、言葉を尽くして、‟今生きる神様”として、語りかけていて下さっているのですね。

主イエス様もおっしゃいました。「わたしの愛の内にいなさい」、「わが愛の内にとどまれ」と。愛されている者として生きなさい。それが人間の幸い、あなたの幸いなのだと。あなたも、あの人もこの人も、主が十字架でその命をささげる程に大切にされている一人ひとり。罪や過ちを犯したとしても何度でも立ち直ることを待っていて下さるお方が私たちには居るのです！そして、そういう神様の愛あっての私たちが「隣り人」として繋がって行くこと、それが「平和」なのではないでしょうか？　「十戒」一つ一つの律法も、私たちが迷い出て、お互いを損なわないための招きの言葉、私たちの「幸い」のための愛の言葉なのだと思います。お祈り致します。